C－34 顔面，頸の形態と被服構成における衿型との関係について（第2報）

名古屋女子大学　○栃原きみえ　山田美都子　市川直子

目的　顔面および頸の形態的因子と被服との関係を明らかにするために，今回は前面体の顔面を形態的に類別化作業を行ない，被服のための人間因子の資料化を試みた。

方法　短期大学生235名を被験者として，顔面を中心とした写真撮影をし，それを用いて各部位の長径，幅径，周径の間接計測を行ない，一方人体による直接計測も併用し，計測結果は統計的處理を行なった。また類型別化作業では，顔面最大幅と顔面長径との比率，およびオトガイ，鬢際の形態等によって類別し，トレシングペーパーを用いて複合図を作成し，検討を行なった。

結果　前面体における顔面最大幅を基準として比率を求めた結果，平均値では，鬢際～オトガイ点の場合1.30であり，頭頂～オトガイ点は1.61，頭頂～頸窩点は2.02であった。また顔面最大幅が，鬢際～オトガイ点の長径に対して，いかなる割合の位置（オトガイを基点として）にあるかを検討した結果，平均値では0.56であった。また顔面の形態について10種に類別を試みたが，いわゆる丸型は全体の11.6%，だ円型は15.6%，卵型は25.5%，逆卵型は5.8%，角型は9.3%，菱型は1.4%であり，また鬢際の形態による類別では，僧帽型が17.0%，かりがね（雁）型は7.1%，富士額型は4.9%，その他は1.8%であった。